初恋相手の冷徹エリート上司が
溺甘に豹変して
独占欲全開で迫ってきます

プロローグ

先ほどまでの賑わいが、まるで幻であったかのように消え失せている。
企業向けアプリの開発成功と大口契約の快挙で沸き立っていたはずのオフィスフロアは、今はもう、いつもの喧騒が嘘のように深い静寂に包まれていた。
照明が落とされたその空間を照らすのは、窓の外に広がる美しい夜景と、私のパソコンから漏れる白い光だけ。
ふと目をやった窓ガラスには、背が高く、長い髪を後ろで纏めた自分の姿が映り込んでいる。
普段、周囲から「クールビューティー」なんて言われることもあるけれど、今の私には、その影がどこか寂しげに見えた。
――カチャッ
静かなフロアに突然扉の開く音が響き、ビクッと肩が跳ね上がった。振り向くと、その扉にもたれかかってこちらを見ている人物がいる。
「片桐(かたぎり)部長⁉　お帰りになったんじゃ……」
「部長？　他人行儀だな。今は誰もいないんだし、昔のように呼んだらどうだ？　吉瀬(きちせ)」

突然、片桐部長――いや、蒼空先輩が低い声で私の名前を呼んだ。
長年、遠い憧れとして記憶の中に封印していたはずの彼が、私のことを覚えていた。
その事実に、心臓が大きく跳ねる。
突然の告白にも等しいその響きが、全身に電流のように駆け巡った。
「えっと……。私のこと、覚えてたんですか？　だったら、何で今まで黙ってたんですか……」
「まあ、それが一番安全だと思ったんだ」
「それって、どういう……」
全く状況が理解できなくて戸惑う私と、妖艶な佇まいで不敵に微笑む先輩。
照明が落とされ静まり返ったフロアで、見つめ合っているのは彼と私だけ。普段は上司と部下として意識しないようにしているが、先輩の整いすぎた顔に混乱しながらも胸が熱くなる。
戸惑いながらもそのかっこよさに圧倒される私と、全てを見透かしているかのような余裕を纏う先輩との間には、あまりにも温度差があった。
「ほら、呼んでみろよ」
「そ、蒼空先輩……？」
「ふっ、懐かしいな。でも、先輩はいらない」
「ええっ⁉　それはどういうことですか？」
「吉瀬――いや、凛花は今日から俺のものだ」
「……⁉」

驚きで目を見開いて固まっている私の元に、先輩が颯爽と近づいてくる。
ハッと我に返った時には、目の前まで来ていた先輩の腕の中に、すっぽりと抱きしめられていた。
一日仕事をしていたはずなのに、仄かなシトラス系のいい匂いがする。ずっと憧れていた先輩の想定外の行動に、すでに頭は真っ白で何も考えられない。
ただ、先輩の胸から聞こえる鼓動が少し速くて、緊張しているのは私だけではないとわかった。
自然な動作で先輩の手が私の顎に添えられ、軽く持ち上げられる。切れ長でクールな目のイケメンと至近距離で視線が交わると、迫力が半端ない。
次の瞬間――
先輩の唇が、私の唇に優しく触れる。突然のことに驚いて抵抗する間もなかった。
最初は軽く触れ合うだけのキスが、だんだんと深くなり私の口内を犯す。
これがファーストキスの私には、息の仕方もわからない。キスの合間に息をするのがやっとで、激しくなるキスに抵抗する術もない。
「んっ……」
無意識に漏れる私の艶っぽい声が、他に誰もいないフロアに響き渡る。
長年憧れて片想いを続けてきた相手からの突然のキスは、本気なのか、気まぐれなのか――
先輩に憧れて初恋をこじらせ、この歳まで恋愛経験のなかった私には、彼の真意がわからない。
触れた唇の感触と、心臓の激しい鼓動だけが現実を訴えかけてくる。
今のこの状況が、夢でも妄想でもないのだとしたら――私は、この数秒で人生の全てを塗り替え

られてしまったのかもしれない。
激しいキスに、とうとう私の全身から力が抜ける。
「おっと」
尻もちをつく寸前に、先輩に抱きとめられた。
「せ、先輩、どうして……」
自分の唇に手を当てて、言葉を失くし、か細い声で問いかける。まだ残る唇の感触に、顔が真っ赤になるのを感じた。
「蒼空だろ。先輩も部長もいらない」
「そんな！　む、無理です！　呼び捨てになんてできません」
目を潤ませながら、抗議の声を上げた。
「そんな可愛い顔で見つめられると、またキスしたくなる」
不穏な言葉が聞こえて、私は両手で口を覆い隠す。
「ほら、言ってみろ」
先輩は社内では誰もが信頼を寄せる完璧な理想の上司で、高校時代も完璧な理想の先輩だった。
その彼が今、目の前で突然の俺様ぶりを発揮していることに、私は混乱を極める。
「そ、蒼空さん……？」
「さんはいらない。まあ、今日のところは許してやるか」
「ありがとうございます……」

口調はあくまでも上から目線で俺様なのに、なぜか先輩の目元が緩んで優しく微笑んだように見えた。そのギャップにやられ、強引に迫られて言わされたのに、私は思わずお礼を言ってしまう。
「凛花は素直で可愛いな」
「もう！　からかわないでくださいっ」
さっきまでの強引な態度から一転、今度は突然激甘な発言をされて、私はパニックに陥った。
「凛花、今日から俺に愛される覚悟をしろよ」
「はいぃ!?」
静かなフロアに、再び私の絶叫が響き渡った――

第一章　過去と再び交わる現在

「さっきから驚いてばかりだが、何か聞きたいことはあるか？」
先輩は余裕たっぷりといった様子で、色気のある笑みを浮かべて私に問いかける。
むしろ、聞きたいことしかない。いきなりキスをしてきたこと。私の名前を覚えていたこと。
――そして今、こんな誰もいないオフィスで二人きりで迫られていること。
「何かって……。とにかく意味がわからないです」
「話は簡単じゃないか。俺が凛花に迫ってるだけだ」
「だから、それがおかしいんですって。何で今さら……」
嬉しくないと言えば嘘になる。でも、手放しでは喜べない。
「凛花にとってはそうかもしれないが、俺にとっては今が絶好のタイミングなんだ。高校の時から、サバサバとして働き者の凛花が気になっていた。でも当時は部活一色の生活だっただろ？　全国の頂点に立つことを目標に頑張っていたから、恋愛どころじゃなかった」
私は頭の中で、改めて自分にとっての「蒼空先輩」について考える。私の中で彼は、永遠に手の届かない、青春時代の思い出の中でキラキラと輝く遠い憧れの存在だ。
先輩は高校時代から常に周囲の注目を集め、誰もが認める華やかな人生を歩んできた人気者だけど、不思議と当時から彼女の噂はなかった。
それは、彼が女性との間に絶妙な距離感を保つことに長けているからなのだろうか。
硬派でクールな先輩は、昔から謎が多いのだ。もちろん、そんな謎めいた一面もまた、私が先輩に惹かれた理由の一つだった。
高校を卒業してアメリカの大学に進学した先輩は、長期休みに帰国し一度だけ部活に顔を出してくれた。
その後は、先輩とは会う機会がなく私も高校卒業を迎えた。
そして大学に進学し、今の会社に就職して仕事一筋で頑張っていた私に、ある日突然、再会の瞬間が訪れる。ヘッドハンティングされた彼が、部長という立場で突然私の上司になったのだ。
オフィスに先輩が現れた瞬間、その完璧なルックスと圧倒的なオーラに魅了された女性社員達から黄色い声が上がったのは言うまでもない。
驚いて固まる私に視線を向けることなく、先輩は慣れたように淡々と自己紹介していた。あの時、私が感じた複雑な心情を思い出すと、今でも切ない気持ちになる。
他の社員同様に「はじめまして」と挨拶されてからは、彼を片桐部長と呼び、高校時代のことは封印してきた。
そんな再会から二年――
なぜ今、私はこんな状況に陥っているのか……
「蒼空先輩は、ずっとモテモテでしたけど……」

「それが嫌だったんだ。人の都合も考えずに一方的に気持ちを伝えてきて、断るとひどいと言われるんだぞ」
「確かに……」
「大学は海外だったし、勉強ばかりしていたから」
「一度部活に来てくれたから、次はいつかなってみんな待ってましたよ」
「みんなじゃなくて、凛花は？　俺はずっと、凛花に会いに行こうと思っていた。だからこの会社に入って凛花がいたことに驚いたが、ここで再会できて本当に嬉しかったんだ」
まさか、先輩がアメリカから日本にいる私に会うために、何か行動を起こそうとしてくれていたなんて。胸の奥が熱くなり、さっきまでの混乱と戸惑いが、大きな歓喜に塗り替えられていく。
「でも『はじめまして』って言われた時は、すごくショックだったんですよ」
「ヘッドハンティングされて入社したのに、入社早々に凛花を口説くわけにはいかなかったんだ」
「それにしても……。私のことを覚えていないんだと思って傷つきました」
「凛花を守れる状況にない中では、知らないふりが最善だと思ったんだよ。まあ、俺が不甲斐ないばかりの言い訳だが……」
いつも自信に満ち溢れている先輩の、意外な一面を目の当たりにして驚いた。そして、私だけに向けられる熱い視線に、諦めていた恋心が一瞬にして蘇ってくる。
「そう言われても、あまりに突然なのでこの状況が信じられなくて……」
「気持ちはわかる。でも毎日顔を合わせるオフィスで、凛花が俺以外の男と話をしているだけで嫉妬するくらい、もう限界なんだ」
「ええっ!?」
嫉妬？　いつもポーカーフェイスでクールな先輩が？　信じられない。
「何を驚いてる？　凛花に下心がある奴が山ほどいるだろう？」
「はい？　そんな人いませんが……」
「凛花が気づいていないなら、敢えて誰かは言わない。いつ凛花を取られるかと、ずっと冷や冷やしていたんだ」
誰か他人の話を聞かされているような、現実味のない言葉に聞こえた。
初恋の相手で、ずっと憧れていた先輩からの甘い言葉に胸が熱くなる。その熱を帯びた視線に見つめられ、私はもう逃げ出すことなど到底できなかった――

＊　＊　＊

体育館でボールを追って走りまわる部員達。
――バンバン、キュッキュ
ボールが跳ねる音と、床とシューズが擦れ合う音が辺りに響く。
その中心には、いつもチームに指示を出し、ひときわ目を惹くイケメンがいた。
身長一八二センチでサラサラの髪に、切れ長でクールな目元が印象的な整った顔立ちの彼は、

チームのキャプテンを任されていた。頭脳明晰で運動神経抜群の、天に二物も三物も与えられた蒼空先輩は、バスケ部だけでなく学校全体、いや他校の生徒にまで知られている、男女どちらからも憧れられる存在なのだ。

男子とはふざけ合ったりするごく普通の高校生だけど、女子とは完全に一線を引いている。簡単に近づけないオーラを出し、クールを通り越して冷たい印象を与えていた。声を掛けられても聞こえていないのか、敢えて返事をしないのか……

学校で人気のある女子でも、先輩にだけは相手にしてもらえない。

そんな蒼空先輩が唯一まともに会話をするのが、私達バスケ部のマネージャーだった。

入学した年は蒼空先輩目当ての女子で、マネージャー希望者が殺到したらしい。

明らかに動機が不純で練習にならないからと、顧問の判断でこの年はマネージャーの入部は認められず、元々バスケ部にいた蒼空先輩の一学年上の女子二人が、周囲から妬まれながらもマネージャーを務めた。そして言うまでもなく、次の年もマネージャー希望の女子が殺到した。

三年生のマネージャーは夏に引退してしまう。さすがに今年は誰も入部させないわけにはいかない……

そこへ中学でバスケをしていたが、ケガで引退して選手としてはもうプレーできない男子がマネージャーを希望したのだ。適任者が現れホッとしたと、のちに顧問が私達に話してくれたことがある。

そして、蒼空先輩が三年生の年、私がこの高校に入学したのだ。

小学生の時からミニバスのチームに入っていた私と親友の優香（ゆうか）は、中学でもバスケ部に入っていた。当然のように、高校でも一緒にバスケ部に入るつもりで進学先を選んでいたのだけど――

中三の夏、進路を決めるために地元の高校へ見学に行った。

女子バスケ部で実績を残している学校だったが、部の雰囲気が悪くて全く魅力を感じない。次に行ったところは、部の雰囲気は悪くなかったけれど校風がいまいちで、志望校を決めかねていた。

そこで女子バスケ部はないけれど、男子バスケ部が強いと評判の学校に行くことにした。今まで行った学校より学力のレベルが高く、それに比例するように生徒達の活気があり、印象が全然違う。

これまで見てきたどの学校よりも、ここで過ごす自分の姿が鮮明にイメージできた。

ここに行きたい――迷いが消えた瞬間の高揚感に包まれる。

学校説明会のあとは、お待ちかねの部活動見学だ。私と優香は迷わずに体育館へ向かった。体育館の中からは、ボールの弾む音と活気溢れる声が聞こえてくる。

期待に胸を膨らませて中を覗き込んだ、その瞬間だった。目の前のバスケットゴールに向かって、ものすごい高さでジャンプする姿が視界に飛び込んできた。驚いて立ち尽くす私の前で、放たれたボールは吸い込まれるように網を揺らした。

華麗なジャンプに、吸い込まれるようなゴール。そして、そこにいた一人の男子生徒の姿に、私は完全に目を奪われてしまった。

ほんの一瞬、彼と視線がぶつかった気がした。夢の中にでもいるような感覚に陥り、立ち尽くす

ことしかできない。けれど彼は、そんな私の視線など意に介さず、再びボールを追ってコートの奥へと走り去っていった。

その鮮烈な光景は、一瞬で私の世界を塗り替えてしまった。それは、この先の私の人生を決定づけるような、運命的で衝撃的な出会いだった。

どうしてもこの時の彼にもう一度会いたくて、彼がいるチームを支えたくて、女子バスケ部がないことを承知で進学を決めたのだ。

この高校のバスケ部はいつも一回戦負けをしていたはずなのに、先輩が入部した年に県大会で優勝を成し遂げる。もちろん先輩一人の力ではないけれど、エースである彼の存在は大きかった。

先輩が入部してから、練習や試合に取り組む姿勢が変わり、存在自体が他の部員達に良い影響を与えているのだと、顧問の先生が事あるごとに褒めていた。当時、サボり気味だった他の部員達まで刺激を受けて真面目に練習を始めたのだ。

一年目は、県大会で優勝し関東大会へ出場を果たしたが、全国大会の切符を手に入れることができずに悔し涙を流す。

その悔しさをバネに翌年は関東大会で優勝し、全国大会に進んだ。ただ、関東で一位になっても上には上がいる。全国大会は準々決勝で敗れて、優勝は叶わなかった。

最後の年こそ全国制覇を誓い再始動した矢先、バスケの経験と熱意がある私と優香が熱い思いで入学する。

あの衝撃の出会いから、私と優香は必死で勉強に取り組んで、バスケ部のマネージャーをするためにここまで来たのだ。

休み明け、意を決して担任に志望校を伝えたものの、返ってきたのは「無謀だ」という厳しい言葉だった。

決して私たちの成績が悪いわけではない。あの学校が、地域でも指折りの難関校だったのだ。

それでも諦めることなく努力した私達の学力は目に見えて上がり、先生達も驚くほどだった。そして、無事に受験を認めてくれたのだ。

男子バスケ部のサポートをしたい一心で、強い信念を持って挑んだ受験。二人で合格を勝ち取った時は、私達以上に先生や両親が大喜びしてくれた。

入学式を終えると、やはりと言うべきか、明らかに先輩目当てのマネージャー希望者が体育館に押し寄せた。けれど、遊び半分の他の生徒達とは違い、私達にはバスケ経験者としての誇りと、この学校でしか叶えられない目的があった。

その熱意が顧問の先生にも届いたのだろう。正式に入部が認められた時は、ようやくスタートラインに立てたのだと心の底から安堵した。

当然、選ばれなかった他の女子達からはブーイングの声もあったようだ。

だが、私達は先輩はもちろんのこと、他の部員に媚びたり、必要以上に距離を詰めることもなかった。ただひたむきに、裏方としての仕事を全うする私たちの姿に、いつしか陰口や批判の声は聞こえなくなっていた。

部員とマネージャーという一線を決して越えることなく、純粋に勝利を追い求めた日々。

その結果、先輩達の集大成となる最後の大会で、並みいる強豪校を抑えて全国の頂点に立つことができたのだ。
いつもクールな先輩でさえ、この時ばかりは部員達とこれまで見たことがないほどはしゃいでいて、その姿を近くで見ていた私も、一緒に喜び涙したことは一生忘れない。
先輩の代が引退したあとも、後輩達が頑張ってはいたけれど、全国大会出場は叶わなかった。県大会で優勝しても、関東大会で悔し涙を流す。
だから母校のバスケ部では、未だに先輩達の代は伝説として語られている。あの瞬間を共有できた仲間の絆は永遠だ。
けれど、卒業という節目は無情にもやってきた。先輩が新しい世界へ踏み出すのと引き換えに、私の初恋は行き場を失い、叶わぬ恋へと変わった。
まさか大人になってから再会するなんて、予想だにしなかった。
けれど、かつての憧れの先輩は、今も眩しい高みにいて、私にとっては遠い存在であることに変わりはない。
この恋が叶うはずなんてない。そう信じて疑わず、最初から諦めていたのだ。
――さっき、彼に唇を奪われるまでは。

第二章　完璧上司な先輩との関係

蒼空先輩――改め蒼空さんと見つめ合ったまま、私の頭の中はまだパニック状態だ。
信じられなくて驚いている反面、嬉しさもある。
そう、昔からずっと憧れてきた先輩で、初恋の相手なのだからもちろん嬉しい。ただ、夢ではないかと疑うほど、今の状況が現実だとは思えなかった。
「凛花、仕事は？」
「えっと……。終わって帰ろうと思っていたところです」
一旦この場から逃れて、頭を冷やしたいと思った矢先、先輩に先手を打たれる。
「敬語はいらないって言っただろう」
「そんなこと、急に言われても困ります」
すでにキャパオーバーで、何を言われても頭に入らない。
「それに、一人での残業も危ないから止めろよ」
「そんな、社内で何もないでしょう。それに今まで大丈夫でしたよ」
「そんなにしょっちゅう残業していたのか？」
「い、いえ」

先輩の追及は思ったよりもしつこく、これ以上口を開くと墓穴を掘りそうだ。
「さっき、俺からキスされたのは誰だ？」
「はい？　それは先輩が！」
「だから、先輩じゃないだろう？」
「……蒼空さんが」
今は何を言っても揚げ足を取られる。
「俺以外の男から同じことをされたらどうするんだ？」
「そんなの抵抗するに決まってるじゃないですか！」
即答した私は、自分の失言に気づいていなかった。
「それは俺だから断らなかった、受け入れたってことだよな？」
「えっ……？」
問い返されて初めて、私は言葉の意味を理解して、心臓が跳ねた。これでは蒼空さんだから受け入れたのだと言っているようなものだった。
「まあいい。これからが楽しみだな」
「そんなっ」
いつの間にかパソコンの電源は落とされ、蒼空さんが私の荷物まで持っている。
「もう遅いからオフィスを出よう。警備員さんにも迷惑だ」
「は、はい」

遅くまでオフィスに残っていることが、誰かの迷惑になるなんて考えたことがなかった。
ごく自然に、私の腰に蒼空さんの手が添えられ、エレベーターへ向かっている。それはエスコートというより、私の逃げ道を塞いでいると言った方が的確だった。

オフィスビルの二十八階に入居する弊社クラウドフラップは、スマホアプリを開発する会社で、ビジネスからゲームまで幅広く展開する。スマホが世に出始めた頃に、社長が若くして立ち上げた会社は、今では支社も合わせると社員数が五百名を超える企業に拡大していた。
社員の平均年齢も三十代前半と若手が活躍し、完全な成果主義で実力のある人材は年齢に関係なくハイスピードで昇進・昇給していく。それが成長している要因だ。
蒼空さんのような精鋭たちが、ヘッドハンティングされて次々と合流してくる。株式市場にも上場を果たし、今やこの業界で最も注目されている会社だと言っても過言ではない。
蒼空さんも、今回の企業向けアプリの開発成功という成果が評価され、更に上の役職へ昇進するのは間違いないだろう。高校時代、ただ遠くから見つめるしかなかった憧れの先輩。せっかく再会できたと思ったのに、彼はまた、あの頃のように遠い存在になろうとしていた。
――それが、どうしてこんな状況になっているのだろうか。私は夢でも見ているのだろうかと疑いたくなる。
蒼空さんに腰を抱かれて歩いている姿を会社の人に見られたらどうなるかと、考えただけでも恐ろしい。

一人での残業が危ないと言われたが、これまでは一人になるまで会社に残ったことはなかった。いつも蒼空さんや上司たちが私より必ず遅くまで残っている。

そんな私達が偶然にも二人きりになった。しかも、蒼空さんにとって大口の仕事に一区切りついたお祝いの日。この日は私にとっても運命の日になるのかもしれない。

さっきの突然のキス以降、驚くことばかりだけど、私の平穏で単調な日常は確実に何かが変わろうとしていた……

遅い時間はビル全体が閑散として、昼間の活気が嘘のようだ。シンと静まり返るフロアは少し怖く感じる。蒼空さんが側にいてくれて良かった。

エレベーターも日中は混み合って時間がかかるけれど、この時間はすぐに到着する。中は二人きりで、ドキドキと胸の高鳴りが止まらない。隣から視線を感じて、蒼空さんに顔を向けると熱い視線が交わった。

「そういえば、残業するほどの急ぐ仕事があったのか？」

「えっと……」

熱い視線に反して、冷静な言葉が掛けられる。すぐに言い訳の言葉が出ない私を見て、何かを察したようだ。

「ちっ、また林（はやし）か」

「……」

無言の返事が事実だと肯定している。でも実際にそれが残業の原因なのだから、誤魔化しようがなかった。

私の部署の先輩で、林佐知（さち）という仕事ができる風の女性がいる。言葉の通り「風」で、実際には仕事が全くできないのだ。ところが、男性社員にだけ態度が良く、そして悪い意味で要領がいい。

以前から蒼空さんは林先輩の本性を見抜いて、ことあるごとに注意をしている。他の男性社員も気づいてはいるけれど、林先輩に頼むと何でも引き受けてくれて、完璧な状態で返ってくるので、つい頼ってしまうのだ。

林先輩自身が完璧な仕事をしていれば何の問題もない。

ところが完璧な状態に仕上げるのは、私をはじめとした後輩達であって、決して林先輩ではないのだ。引き受けた仕事を後輩に振り分け、さも自分がしたように返している。

何より問題なのが、林先輩は蒼空さんに好意があって、隙を見つけては迫っていた。そして蒼空さんに好意のある女性には、裏で嫌がらせをしているという噂まである。

「林の件は俺に任せておけ」

「えっ？」

「なんとかしなくてはと思っていた。ところで、遅くまでかかるほどの仕事はどこのだ？」

「……」

更に言葉を詰まらせる私に、勘の良い蒼空さんはすぐに気づいたようだ。

「はっきり言ってくれ。今後のためだ」

「……田中さんの……」
「あいつ」
彼は蒼空さんの直属の部下に当たる。蒼空さんの所属する開発部一課は、企業からの依頼を受けて一般ユーザーに向けたアプリをメインに開発している部署だ。
私は開発部二課の所属で、企業アプリの担当がメインだが、部全体の状況を把握しサポートする立場でもある。だから一課の仕事をしても問題はない。だからといって二課の仕事以外で、残業をするほど仕事を請け負う必要もないのだ。
現に仕事を押しつけた林先輩の姿もなければ、田中さんの姿もなかったのだから……
「月曜の午前中に必要な資料だと聞いていたので、今日中に完成させる必要があると思って」
「それで？　仕事を頼んだ林と田中は？」
「田中さんは、打ち合わせに出て直帰すると聞いています。林先輩は……定時の頃に見かけたんですが」
いつものことだと気にもしていなかった。
「そういえば数日前に林が、週末は合コンだと大きな声で話をしていたな。田中は確かに打ち合わせだが、人に頼んでいるのなら戻って来るべきだろう？　よくわかった」
「え!?」
「大丈夫だ」
あれだけ蒼空さんを追いかけ回しているのに、合コンは別だと言っていたことを思い出す。目の

前で不敵な笑みを浮かべる蒼空さんは黒いオーラを纏っていて、全く大丈夫な気はしない。
「ところで凛花の週末の予定は？」
「え？　特にはありませんが……」
突然話題が変わり、つい素直に答えてしまった。
「じゃあ、今夜から凛花の時間は俺がもらう」
「はい？　それはどういう……」
「さっきから変な声を出してどうしたんだ？　すぐに取って食いはしない……。多分な」
最後にボソッとつぶやいた言葉は、私に届いていなかった。
「先輩が変なことばかり言うからっ、んんっ」
先輩と発した瞬間、蒼空さんの唇が私の口を塞ぐ。なぜ急にキスをされたのかわからず、抵抗すら忘れて呆気に取られた。
その間にエレベーターが、チンッと軽快な合図で一階に到着を告げる。
到着と同時に何もなかったように、私の腰を抱いてビルの出口に向かって歩き出した。私は、抵抗する余地なくついて行く。
不意に訪れた憧れの蒼空さんとの二人の時間に、嬉しさよりも急展開で戸惑うばかりだ。しかも、急なキスに理解が追いつかず、悶々とする。
「とりあえず、食事をしよう」
「えっ？」

「お腹空いてないか？」
昼食を食べてから、この時間まで何も口にしていない。そう問われると急に空腹を感じてきたけれど、時間が気になってしまう。
「終電もあるので、あまり時間がないですが……」
「さっき言っただろう？　凛花の時間をもらうって」
「……」
ただの冗談だと思っていた。時間をもらうとはどういう意味なのだろう。蒼空さんが何をしようとしているのか、その真意が全く読めなかった。
突然の告白、そしてそこからのキス――
昨日まで、いや先ほどまで、ただの上司と部下で先輩と後輩の関係だったのだから、今の状況が夢の中にいるようで、まだ現実味がない。
本当なら週末の今日も、押しつけられた仕事の残務処理で、一人でオフィスに居残っているはずだった。それなのに今の私は、訳もわからず会社を離れ、蒼空さんの隣をどこかへ向かって歩いている。
「着いた。ここ」
「……」
到着した建物を見上げて、驚きで黙り込んでしまう。
会社から徒歩数分で着いた目的地は、最近オープンしたばかりのラグジュアリーホテルのＳＡＫＵＲＡだった。
神楽坂（かぐらざか）グループのこのホテルは、「愛する人と過ごす最高の空間」をコンセプトに、社長の愛する妻をイメージし、その名を冠して建てられたと話題になっていて、連日マスコミが取り上げている。
名前の通り和のイメージをふんだんに取り入れていた。和洋折衷の絶妙なバランスが絶賛され、世界の名だたる有名人がオープンからこぞって訪れる人気の場所だ。
一般庶民の私には縁のないホテルを前に、怖気づくのも無理はないだろう。
「ここって……。私、仕事帰りで服装が……」
「そのままで大丈夫だ」
「でも……」
服装も気になるが、こんなに人気のホテルに予約もなく訪れて、食事ができるのだろうか。
「ここのホテルの関係者と知り合いなんだ」
「えっ⁉」
「夜景も綺麗だし、食事もできる。行こう」
私の疑問はあっさり解決され、断る選択肢はなくエスコートされて、エントランスに足を踏み入れる。宿泊客のチェックインの時間はピークを過ぎて、人通りはまばらで少しだけホッとした。
「凛花、ここに座って待っていて」
高級なソファに座るように促され、背筋を伸ばしたまま固まってしまう。

そんな私をよそに蒼空さんは慣れた様子でフロントに行き、何か話をしていた。
周りは見るからにセレブな人達ばかりで、パーティーかと思うほどのエレガントなワンピース姿の女性や、一目で高級ブランドのスーツだとわかる上質な装いの男性が目の前を通り過ぎていく。
私の服装は、ワンピースにカーディガンを羽織っているけれど、あくまで仕事用なので華やかさはなく、控えめな色合いだ。
仕事帰りなのでロングヘアーを後ろで纏めていて、ここのホテルの客層とはかけ離れた地味さだと思う。
「待たせた。行こう」
一方の蒼空さんは、スーツをスタイリッシュに着こなし、バスケ部のエースだった長身に鍛えられた肉体の超絶イケメンで、常に人目を惹いていた。
元バスケ部の私も長身なので、蒼空さんと並ぶと身長だけはバランスが取れているとは思う。でも、それ以外は全く自信がない。
エレベーターへ向かう間も、蒼空さんはホテル中の客の視線を集めていた。
隣を歩く私にまで視線を感じるのは、きっとアンバランスさに驚かれているからだろう。見られることに慣れている蒼空さんと違い、私一人がハラハラしていた。
上層階行きのエレベーターに乗り込むと、蒼空さんはカードをセンサーにかざして、最上階のひとつ下のボタンを押した。ホテルのエレベーターにそんな仕組みがあることを知らなかった私は戸惑うしかない。

私達を乗せたエレベーターはぐんぐん上昇していく。そして目的の階に到着して扉が開いた瞬間、目の前のあまりの豪華なフロアに、私は思わず目を見開いて固まってしまった。
「こっち」
私と違って平然とした蒼空さんにエスコートされてエレベーターを降りると、足元のふわふわの絨毯に足を取られそうになる。
「蒼空！」
「あっ、陽さん。こんばんは」
声の主に顔を向けると、優しい表情をしたイケメンが微笑んでいた。
「こ、こんばんは」
なんとか声を絞り出し私も挨拶をしたけれど、表情はかなり硬いと思う。
「ようこそSAKURAへ」
「凛花、こちら神楽坂陽さん」
「か、神楽坂……」
驚いている私をよそに、二人が会話を続ける。
「陽さん、俺の高校の後輩で部下の吉瀬凛花さん」
「そうか、君が……。やっと会えたね」
「えっ……」
やっと会えた？　言葉の意味がわからなかった。そもそも蒼空さんと神楽坂さんは、一体どうい

う知り合いなのだろうか？
「ここで立ち話もなんだから、カウンターへどうぞ」
そう言って、神楽坂さんに奥のバーに案内される。
正面は一面ガラス張りの窓で、高層階からの夜景がとにかく素晴らしい。
豪華なソファセットが何台も置かれ、カフェなのかバーなのか、もしくはレストランなのか。食事やお酒を飲みながら談笑している人の姿が見える。
戸惑う私とは違い慣れた足取りでカウンターに向かう蒼空さん。私はただ黙ってついて行くしかない。
「何飲む？」
バーカウンターの中に入り、私達の正面に立った神楽坂さんから聞かれた。こんなオシャレな場所に縁のない私は、何を頼んでいいのかさえわからない。
「俺はビール。凛花は、アルコール度数の低い甘めのカクテルで」
「了解！」
私はアルコールにあまり強くはない。会社の飲み会では、アルコールは最初の一杯だけであとはいつもソフトドリンクだ。私には無関心だと思っていた蒼空さんが、そのことを知っていたなんてと嬉しさを覚えた。
カウンターの中にバーテンダーらしき人がいるにもかかわらず、私のために神楽坂さんが自らカクテルを作ってくれていた。

「どうぞ」
「わー、綺麗」
「凛花、乾杯」
「蒼空さん、お疲れ様でした。そしておめでとうございます」
「ありがとう」
アプリの完成と契約のお祝いを、まだ蒼空さんに直接伝えていなかった。カクテルは薄いピンクで、見た目にも可愛らしく、飲んだらピーチの優しい甘さが口の中に広がる。
「で？　やっと二人はカップルになったのか？」
「ええっ！」
「ちょ、陽さん！」
慌てた様子の蒼空さんが新鮮だ。ところで二人はどんな関係なのだろう。聞いてもいいのだろうか。
「凛花ちゃんって呼んでもいい？」
「は、はい」
名前を呼ばれておどおどと返事をする私をよそに、二人は軽やかに会話を進めていく。
「高校の頃から蒼空はモテモテだったんじゃない？」
「はい。他校の生徒まで蒼空先輩目当てで学校まで来ていました」
「凛花、真面目に答えなくていいから。俺は陽さんほどモテませんよ」

二人が親しい間柄だということはひしひしと伝わってくる。
「あの……お二人の関係は……」
「そうだな。そこからだな。名前でわかると思うけど、陽さんは神楽坂グループの御曹司で、現社長の弟さんなんだ」
「蒼空！　御曹司はやめてくれよ」
神楽坂さんが恥ずかしそうにしている。
「事実じゃないですか。凛花、うちの会社がＳＡＫＵＲＡのアプリを作らせてもらったんだ」
「あっ、蒼空さんがうちに入社してすぐに、大きなホテルの仕事を受注したって盛り上がっていたのってＳＡＫＵＲＡでしたっけ……」
「蒼空のアイデアと丁寧なプレゼン、そして人柄に惚れて依頼したんだよ。それからだから二年弱の付き合いか」
もっと長い付き合いのような親密さだ。
「陽さんは、俺にとって兄のような存在なんだ」
「素敵な関係ですね」
「常にモテモテの蒼空が長いこと片想いしているって聞いて、どんな女の子かずっと気になってたんだ」
――蒼空先輩が、私に片想いを？　そんな言葉が頭の中でぐるぐると反芻（はんすう）される。嬉しさよりも先に、その真偽を疑ってしまった。

「……。それって、本当に私のことですか？　なんだかすみません」
「ぷはっ、まさかの天然無自覚ちゃん？」
隣にいた神楽坂さんは、まるで大物女優でも前にしたかのような驚きの目で私を見ている。
「ですね」
「え？　天然？　誰がですか？」
「うん、凛花ちゃんはそのままがいいと思うよ。いや、蒼空のためにそのままでいてくれ」
若干残念な子を見る目で見られているのは気のせいだろうか。
それにしても、こんな大きなホテルの御曹司まで魅了している蒼空さんの魅力は計り知れない。
学生時代からいつも周りに人が集まっていたけれど、今もその魅力は健在なのだと改めて実感する。蒼空さんこそ、天然の人たらしだ。
「あまり蒼空の邪魔をしたら悪いから俺は行くよ。あとは彼に注文して」
そう言って、バーテンダーを指さしている。
「陽さん、ありがとうございます」
「ありがとうございます」
「健闘を祈るよ」
神楽坂さんは颯爽とこのフロアをあとにした。
「オーラに圧倒されました」
「な？　かっこいいだろ？　俺の憧れの人だよ」

「蒼空先輩も充分かっこいいですよ」
「凛花、もう忘れたのか？　先輩じゃないだろう？」
頬を赤くしている蒼空さんが、何かを誤魔化すように私の言葉を指摘する。見慣れない表情に、よくよく自分の発言を振り返ると、無意識のうちに心の中の蒼空さんへの気持ちを口に出していた。そのことに気づいて、私まで頬が赤くなる。
「いつも凛花には驚かされてばかりだ」
「すみません、今のは忘れてください」
「しっかり聞いたし、絶対に忘れない。これから本気でいくから覚悟して」
その強引で自信に満ちた言葉に、心臓がきゅっと締めつけられる。
こんな発言でさえサマになるのだから、イケメンはズルイ。なんとか話題を変えようと、ここへ来てから疑問に思っていたことを小声で聞いてみる。
「週末なのにお客さんが少ないですね」
「……」
蒼空さんは、キョトンとした表情だ。何か間違ったことを言ったのだろうか。
「ここはクラブラウンジと言って、クラブフロアの利用者だけのラウンジなんだ」
「えっと……もしかして、神楽坂さんのお陰で？　お礼をきちんと伝えられてないです……！」
「まあ、そうだな。その話はまた今度。それよりお腹空いただろう？　食事をお願いしているから食べよう」

なぜか蒼空さんから、歯切れの悪い返事が返ってくる。
「食事？」
神楽坂さんに会った驚きで忘れていたけれど、食事と聞いた途端に空腹だったことを思い出した。
「テーブル席に移動されますか？」
「はい」
絶妙なタイミングで声が掛かる。確かに、カウンターで食事をするのは無理があった。
再び蒼空さんにエスコートされて、案内された窓際の席まで行く。窓の外に見える、あまりに贅沢な夜景に言葉も出ない。宝石箱をひっくり返したようなという表現がぴったりな、ネオンが光り輝く夜景に魅了された。
「凛花、シャンパンで乾杯しないか？」
「私、アルコールに強くないですよ？」
「酔っても俺が最後まで責任を持つから大丈夫だ」
そう言われると、この特別な雰囲気もあって断れなくなってしまう。
「途中で面倒になって、放置しないでくださいよ？」
「凛花こそ、俺の気持ちを甘く見るなよ」
正面の席から妖艶な視線を向けられてドキッとした。
高校の時から落ち着いた雰囲気だったけれど、歳を重ねて更に大人の魅力が増している。
最初にそんな蒼空さんに憧れてしまったせいで、その後どんな男性に出会っても心が動くことは

なかった。
だからこそ、今こうして大好きな蒼空さんに告白されても、未だに信じられないし、夢ではないかと疑ってしまう。
夢なら醒めないで――切実な私の願いだ。
「どうした？　俺の顔に何かついてるか？」
「かっこいいです……」
アルコールが効いているのか、無意識に本心がポロリと漏れる。
「もう酔っぱらったのか」
「酔わなきゃやってられません。現実とは思えないんですもん」
「どうしたら信じる？」
「……」
真剣で射貫くような視線に、身体の奥底から震えがきそうだ。蒼空さんの指が私の唇に伸びて、優しく触れてなぞられる。ずっと蒼空さんに片想いしていた私には、もうお手上げ状態だ。
「蒼空さんみたいに慣れてないので……」
「人聞きの悪いことを言うなよ。俺の心はずっと凛花一筋だ」
「じゃあ、初心者同士ってこと？」
「まあ、気持ちの上ではそうかな。俺の方が年齢が上だし、男だから凛花を喜ばせる知識は得ているが」

それがどういう意味なのかはわからない。でも、蒼空さん相手に初心者を恥じる必要はなさそうで安心する。出会ってからの時間は長いのに、お互いのプライベートを話すのはこれが初めてだ。
高校時代にバスケ部の合宿で宿泊をしたことはあるけれど、あの頃はバスケ一色だったから、二人きりで話す機会がなかったのだ。
今更ながらに、新しい発見や懐かしい思い出話で話題が尽きなかった。
「せんぱーい、スキ」
完全に酔っぱらった私は、蒼空さんの存在に安心していつもより饒舌になる。
社会人になってから、会社の飲み会では酔わないように気をつけていたし、こんな風にふわふわした気分になるまで飲んだのも初めてだ。さっきまで意識して蒼空さんと呼んでいたけれど、酔った今、元の先輩呼びに戻っている。
「完全に酔っぱらったな」
「だってー、せんぱいが飲んでいいって言うからー！」
「ああ、俺の前だけだぞ。俺だけの凛花を堪能するから行こうか」
「帰るの？　まだいやー」
完全に酔っている私は、蒼空さんの熱い視線に全く気づいていなかった。この時には、思考回路もストップして蒼空さんの声も遙か遠くに聞こえている。
逞しい腕に支えられてエレベーターに向かっているけれど、足が思うように動かない。無事に家まで帰れるのか不安になっていた。

エレベーターに乗り込んで、蒼空さんが先ほどのカードをかざしている。そしてなぜか私達がいた階のワンフロア下のボタンを押した。帰るならフロントのある一階ではないのか。案の定、すぐに到着して扉が開いた。

「ここは？」

私が疑問を口にすると、蒼空さんがそれに答えてくれる。

「今日はここに泊まる」

「ええっ!?」

「何を驚いてるんだ？　今夜から、凛花の時間は俺がもらうと宣言しただろう？　凛花も帰りたくないと言ったじゃないか」

「……」

今夜からというのは、そういう意味だったのかとここでようやく理解した。今日はたまたま残業していただけで、約束をしていたわけではないのに、何もかも計画されていたように感じる。蒼空さんから滲み出る大人の余裕が、そう思わせているのだろうか。

エスコートされて入った部屋は豪華で、現実味がない。酔って夢を見ているのだと言われた方が納得できる。

あまりにも突然のことで、酔っていなかったら、この非現実的な状況に逃げ出していたかもしれない……

「俺は真剣なんだ。でも、嫌がる凛花に無理強いをするつもりはない。もちろん諦める選択肢はないから、ガンガン攻めていくが、凛花の気持ちを最優先させる」

「蒼空さん……」

会社からここに来るまで、いつもより少し強引で俺様な感じだったけれど、嫌ではなかった。

どちらかといえば、奥手の私にはこれくらいがいいのかもしれない。

蒼空さんの誘いがなければ、この先もずっと憧れて片想いしているだけだった。それに、強引な発言とは裏腹に、ここまで来ても私の気持ちを最優先してくれる。

あとは、一歩踏み出す勇気だけ――

素直になって、蒼空さんに私の全てを委ねたいと思った。

「ずっとずっと、憧れの人で、蒼空先輩が大好きです。私を彼女にしてくれますか？」

いつもなら恥ずかしくて絶対に言えない言葉が、すんなりと出てくる。長年心に秘めていた。永遠に伝えることのない想いだと諦めていた。この瞬間が未だに信じられない。

「ふっ。凛花に俺のセリフを取られたな。やっと気持ちを伝えられる。二人でこれからの未来を共に歩いていこう」

「はい。よろしくお願いします」

まるでプロポーズのような言葉。胸が熱くなり、自然と返事をしていた。私が気持ちを伝えた瞬間、蒼空さんの腕の中に抱きしめられる。

人気者の蒼空さんと付き合う覚悟ができているかといえば、そこまでは考えが及んでいない。でも、どんな困難も一緒なら乗り越えられると思えるほど、信頼感は誰よりもあった。

「凛花、キスしてもいいか？」
「ふふっ、さっきしませんでしたか？」
「きちんと付き合うと言葉で確認してからの、恋人同士になって初めてのキスだ。このキスをしたら、俺はもう止められそうにない……」
真剣な表情で私の視線を捕らえる蒼空さんから、今までの上司であり先輩としての顔は消えていた。恋人として一歩踏み出すことへの確認だとわかる。
ここまで来たら私にも迷いはない。不安はあるけれど、蒼空さんのことを全部知りたい……
「お手柔らかに、んんっ」
お願いしますの言葉でさえ最後まで言わせてもらえないほど、性急に唇を塞がれた。強く抱きしめられたまま私の口内を深く深く犯される。
そのキスは、初めて経験する大人の夜の始まりを告げる合図だった――

何もかも初心者の私。蒼空さんのキスは、そんな私を優しくリードしてくれる。何度も角度を変えて合わさり、慣れない私は息をするのが精一杯。酔いもあって足元から崩れ落ちそうになった。
「おっと」
蒼空さんが支えてくれて、なんとかそこに踏み留まる。ところが体勢を整えようと思った瞬間、身体がふわっと浮き上がった。なんと私はお姫様だっこをされていて、マンガのようなシチュエーションに驚き戸惑ってしまう。

「あの、重いから降ろして……」
「全然重くない。もう黙って」
蒼空さんは迷いなくどこかに歩みを進めていた。お姫様だっこのまま、リビングを素通りしていく。
奥の扉を開けると、部屋の真ん中のキングサイズのベッドが、ここが寝室だと主張していた。
ごくっと思わず息を呑む。いきなり未知の世界に足を踏み入れる扉が開かれた。突然迎えたこの瞬間に、色々な葛藤が沸き起こる。
「一日仕事をした後なのでお風呂に……」
「汗をかいているのはお互いさまだし、今から汗をかくんだ。もう焦らすなよ、我慢の限界だ」
そう言って、ベッドに優しく寝かされた。
私が緊張で身体を硬くしていると、蒼空さんは「ちょっと待って」と足早に寝室から出て、どこかに行ってしまう。そしてすぐに小さな箱を手に持って戻ってきた。
その箱をベッドサイドに置いてジャケットを脱ぎ捨てる。そのままゆっくりとベッドに上がり、四つん這いの姿勢で私を熱い視線で見下ろしてきた。上司で先輩だった蒼空さんではなく、今は完全に男の顔をしている。
私の唇に蒼空さんの唇がそっと合わさった。侵入してきた舌が口内を熱くかき回し、隅々まで執拗に貪る。
「ふんっ……んんっ」

無意識に声が鼻から抜けて部屋に響いた。両手で器用にカーディガンを脱がされ、ベッドと背中の間に手を差し入れて、ワンピースのファスナーが下ろされる。

ワンピースを脱がされて、下着だけの無防備な姿になると羞恥心が襲ってきた。これほど露わな自分を男性の前で晒すのは初めてのことだ。

「恥ずかしい……」

「凛花、綺麗だ」

唇が塞がれて、蒼空さんの手がブラジャーの上から胸をやわやわと揉んでいる。

「あんっ」

自分の意志とは関係なく勝手に口から甘い声が漏れた。

いつの間にか、ブラジャーのホックが外されて、蒼空さんの手が私の胸を直接揉み始める。優しい手つきで先端を擦られると、硬く尖ってくるのがわかった。

私の唇から離れた蒼空さんの唇が、首筋から胸へとゆっくりと下りていく。舌を這わせながら私の胸の先端まで到達すると、吸い上げるように口へ含んだ。

先端を強く吸われ、反対側は指先で捏(こ)ねられる。初めての刺激に身体がビクッと大きく跳ねて、過剰に反応してしまった。尖ったそこを舌で転がされたり、軽く摘(つま)まれたりしているうちに、お腹の奥がムズムズとしてきた。

「ひゃぁっん……！」

あまりの刺激に自然と喘ぎ声が出てしまう。それでも続けられる胸への執拗な愛撫。

下半身がキュッと締まる。もう頭の中が真っ白で、何も考えられない――

蒼空さんが初心者と言っていたのは、どういう意味だったのだろう。

その巧みな愛撫は、経験豊富だとしか思えなかった。初めて知る感覚に、全身が熱く疼(うず)きだす。

片方の手が、私の脇腹から下半身をゆっくりとなぞりながら下りていった。

無意識に閉じようとする脚の間に手が差し込まれて、ショーツの上から上下に擦られる。今まで誰にも触られたことのないデリケートな場所を、蒼空さんの手が優しく這いまわっていた。

「んんっ」

その動きが気持ち良くて、我慢できずに声が漏れ出る。ショーツの横からスルッと指が差し入れられて、大切な場所に直接触れられた。

「ひゃあ」

「少し濡れてきてる」

蒼空さんが指を動かすたびに、ヌルヌルと粘着質な愛液が膣内(なか)から溢れてくる。恥ずかしさを伝えようと、首を横に振ってアピールした。

「凛花、痛くない？　気持ちいいか？」

「わ、わかんない……」

擦られるたびにゾクゾクとする。下半身の奥がキュッとなって、何かが溢れてくる感覚があった。

蕾を執拗に擦られて頭が真っ白になっている間に、ショーツを脱がされて私だけ全裸を晒している。

なのに蒼空さんは、まだ服を着たままの姿だ。

「私だけ裸で恥ずかしいです……」
「ふっ、それは俺に早く脱げって言ってるんだな」
「えっ、ちがっ、そうじゃないっ」
そんなつもりはないのに、催促しているように聞こえてしまったのか。ただ、私だけ脱いでいるのが恥ずかしかっただけなのに……
一旦起き上がった蒼空さんは、ためらうことなく服を脱いでいく。ワイシャツを脱ぎ捨てると引き締まった身体が露わになった。
高校の頃、部活の時はみんなその辺で着替えていたので、蒼空さんの上半身も目にしたことがある。
でも今の蒼空さんの裸は、あの時よりも引き締まっていて大人の色気が半端ない。ストイックに鍛えているとしか思えない肉体美だ。私が見惚れている間に、迷わずスラックスまで脱いでしまい、ボクサーパンツ一枚の姿になっている。
父の着替えている姿ですら、もう何年も見ていない。いきなり男性のパンツ一枚の姿に目のやり場に困る。それに、ボクサーパンツの前が異様に盛り上がっているように見えた。
私の上に戻ってきた蒼空さんが、いきなり胸の先端を口に含んで吸い上げたので、身体がビクッと反応する。そこから唇が身体をなぞるように下へ向かっていった。くすぐったいような気持ちいいような感覚が身体を駆け抜ける。私の両脚を大きく開いた蒼空さんが、蜜口をペロペロと舐めはじめた。

「そんなところ、汚いから……」
首を横に振って止めてもらおうと必死に抵抗する。
「汚くない。ただただ愛おしい」
蜜口から溢れる愛液を、蒼空さんがジュルッと音を立てて舐め上げた。
初心者だというからたどたどしい行為を想像していたけれど、実際は私ばかりが蒼空さんに翻弄されまくっていて、経験値の違いを目の当たりにしている気分だ。
彼が舌と指で私の膣内へ少しずつ侵入してきた。表面はヌルヌルとして、蒼空さんが動くたびに粘着質な音が部屋に響いて羞恥心を煽る。
「少し奥まで指を挿入れるから、痛かったら言って」
言葉と同時に、指が少しずつ私の膣内に入ってくるのがわかった。
「んんっ」
ゆるゆると解すように動かしながら、膣内に入ってくる指が膣壁をダイレクトに擦り、ゾクゾクする。無意識に力が入り指を締めつけ、少しだけ痛みが押し寄せてきた。
「狭い……。痛いか？」
「少しだけ、でも大丈夫……」
蒼空さんは、私が少しでも痛さを感じないようにと時間をかけて解してくれている。お互いの額にはしっとりと汗が滲んでいた。
指を挿入れては広げるように解し、浅いところを刺激している。その間にもキスで唇を塞がれて、

胸を摘まれ弄ばれていた。
もうどれくらい愛撫されているのだろうか。身体はどこを触られても敏感に感じてしまうほど、解きほぐされている。
「凛花、そろそろ挿入れてもいいか？」
「は、はい」
蒼空さんの苦しそうな表情を見ると、自然と頷いていた。
蒼空さんが起き上がって、先ほど持ってきた小さい箱から四角い包みを取り出す。私に背中を向けてボクサーパンツを脱ぎ捨て、もぞもぞと何かをしていた。
再び私のところに戻ってくると、下半身から反り勃つモノが私の視界に入り、その存在を主張している。驚いて思わず後退りしそうになった。
男性のモノを間近で見るのは初めてだし、父親や弟とお風呂に入った記憶も遙か昔でよく覚えていない。
目の前のそれは……大きくて獰猛に見えるけれど、これが普通のサイズなのだろうか。
頭の中でぐるぐると考えても、私の知識では解決しない。再び唇が合わさり、口内に舌が侵入してくると、思考がストップして身体が熱を帯びてくる。
蒼空さんの大きく反り勃つモノが私の蜜口に添えられ、溢れ出る愛液を絡めて上下に擦られると、奥の方がキュッと締まった。同時に胸の先端を捏ねられ刺激されると、頭が真っ白になり声が漏れる。

「はあんっ」
ヌルヌルと蜜口から蕾まで、蒼空さんの硬く大きな熱が擦れて私を刺激した。グッと先端が蜜口にあてがわれただけで、ミチミチと押し広げられる痛みを感じる。初めての痛みと違和感と、そして奥からムズムズとする気持ち良さと――
硬く大きな先端が少し進んでは抜かれる。私を気遣って少しずつ進められていた。眉間にシワを寄せ我慢しているような苦しそうな表情。額に滲んでいる汗が、今にもこぼれ落ちそうだ。私のことを最優先にしてくれる姿に胸を締めつけられる。
「蒼空さん、苦しそう……大丈夫？」
蒼空さんの視線が私へと向けられた。その視線は、想像していた苦悶の表情ではなく、色気がだだ洩れで直視できない。
「俺を煽ってどうするつもり？　大丈夫じゃない。凛花が欲しくてたまらない……」
熱っぽい返事と共に、先ほどよりグッと奥へ押し進められた。
「んんっ」
「狭い。締まる……」
蒼空さんも余裕はないはずなのに、私を気遣って時間をかけてくれている。
「はあんっ」
ゆっくりと時間をかけて私の中に挿入りきったソレが、膣内で存在を主張していた。
「全部……挿入った……」

蒼空さんが言葉を発しただけで、振動が膣壁に伝わるほど密着している。
「凛花、動いてもいいか？」
こんな時まで優しく声を掛けてくれる蒼空さんに、無意識に頷いていた。今までのゆっくりした動きが嘘のように、中から抜かれた次の瞬間、最奥まで一気に貫かれた。蒼空さんは抽送を繰り返し、大きくて硬いモノが私を快楽に導いていく。
初心者の私は、一夜で蒼空さんの手に堕ちた。そして熱く何度も燃え上がる――

＊　＊　＊

俺が初めて凛花に会ったのは、高二の夏だった。
その日は来年度の新入生の学校見学があって、いつものように体育館でバスケの練習をしていると、時折中学生が体育館の横を通っていく。
換気のために一部だけ扉を開けているが、この日は見学者のために全ての扉を開けておくように指示があった。だから、普段は開けることのないゴール下付近の扉も開いている。俺達は自由に見学する中学生を気にすることなく、次の大会に向けての練習に励んでいた。
ゴール下でボールが回ってきて、俺がジャンプをしてシュートを決めた瞬間、目の前の扉から入ってきた中学生二人の姿が目に留まる。そのうちの一人と目が合った。中学生にしては大人びた印象の、色白で長身の女の子。

その瞬間、俺の心臓がドクンと高鳴った――
まだ子供だった俺は、その理由がわからなくて戸惑う。必死に意識をコートに戻して、何食わぬ顔で練習を続けた。次に扉の方を見ると、彼女の姿はもう見当たらない。
彼女の姿は俺の脳裏に鮮烈に焼きついていたが、再会する術もなく、名前さえ知らないまま月日だけが流れていった。
俺は、幼い頃から整った顔立ちをしていると言われてきた。常に女子に付き纏われて、迷惑だと思っている。いつも自分の意思とは関係ないところで、勝手に俺を巡って揉めごとが起こっていた。
そんな苦い経験を踏まえて、中学に入った頃から女子を寄せつけないように予防線を張って、女子を避けて生活するようにしていた。そんな俺が彼女のことだけは何度も思い出すのだから、かなり印象が強く衝撃を受けていた。

衝撃の出会いから半年以上経った春、新入生の中に彼女の姿を見つける。
彼女――吉瀬凛花はバスケの経験者で、俺達は男子バスケ部の先輩とマネージャー希望者として再会した。スレンダーでロングのサラサラの髪が印象的な、クールビューティー。
そんな凛花は、新入生の中でも目立っていて、男子達の間で常に話題の的になっていた。本人は無自覚で、自分が話題にされているなど気づきもしない。
毎年、バスケ部のマネージャー希望者は多数いる。でも、俺や部員目当てで動機が不純な子が多く、顧問が入部を認めない。だから、実はマネージャーが足りていない状況だ。

俺としては、もちろん凛花に入ってもらいたい。だからといって、凛花とどうこうなるつもりはなかった。凛花のことは気になるが、俺には自分で決めた目標があって、達成するまでは女性と付き合うつもりがなかったのだ。

凛花と優香の仲良しコンビが、バスケ部のマネージャーを希望しているという。ところが他にも希望者が殺到していた。そんな中、顧問に二人の熱意が伝わり、結局この年のマネージャーとして二人の入部が決まる。

二人はあっという間にバスケ部の仲間に受け入れられ、俺達をサポートしてくれた。

マネージャーに決まった時は、他の希望者の女子達からブーイングが上がったが、凛花達が揉めごとに巻き込まれないように、裏で手を打った。俺の独断でこうしたことは、今も二人には伏せたままにしている。

そしてこの年、部員全員の力で目標だった全国の頂点に輝く。あの時の感動は一生忘れない思い出だ。

高校を卒業して、いずれは親父の跡を継ぐために海外の大学に進学を決める。大学時代には事業に必要な国際的な会計資格やＩＴの専門スキルをできる限り取得し、経験を積むために大手企業へ就職をした。システムエンジニアとして、必死に働いていた俺に転機が訪れる。

それがクラウドフラップの羽田社長との出会いだ。

学生時代とは違い、ただ仕事に追われる日々。自分が希望した業種で働いているのに、全然楽しくない。給料をもらって仕事をしているのだから当たり前だ、と言われたら俺が甘いのかもしれないが、とにかく体力と気力を奪われる。

そんな時、たまたま友人と訪れたバーで知り合ったのが、羽田社長だった。隣の席に座ったことがきっかけで意気投合し、話をしているうちに彼が、今注目のベンチャー企業の社長だと知る。

一緒に訪れていた友人が先に帰ったあとも二人で話し込むほど、彼は魅力的な人だった。

羽田社長も俺に可能性を感じてくれたようで、事業を拡大するために必要な人材だからと、ヘッドハンティングされた。

俺はこの偶然の出会いと直感で、クラウドフラップで世話になることを決めた。俺がこれまでストイックに努力してきた本当の理由も正直に告げたが、それを知ってもなお、快く受け入れてくれたのだ。

実は、俺は片桐ホールディングスの長男で、ゆくゆくは片桐家へ戻ることになっている。ただ父親の方針が、三十歳になるまでは自分の力で努力し、片桐の名前を出すことなく実績を上げることだった。その約束を守り、今に至っている。

この事情を知っているのは、羽田社長と陽さん、あとは同僚の昌磨と限られた人だけだ。

神楽坂リゾートのクラブフロアは、俺が片桐家の人間だから簡単に取れる。

今まで片桐の名前を使ったことはなかったが、凛花との始まりはどうしても神楽坂リゾートのＳＡＫＵＲＡが良かった。神楽坂リゾートの社長が奥さんを溺愛していることは世間的に有名で、それにあやかりたい気持ちが大きい。

しかし、まさか思わぬ縁で入社したクラウドフラップで、凛花と再会できるとは思っていなかっ

た。俺は平静を装っていたが、凛花を見つけた時の驚きとその運命に感謝したことは言うまでもない。

高校時代より更に美しくなり社内でも目立つ存在で、多数の男性社員達が凛花を狙っていた。父親が納得する実績を上げるという目標を達成するまでは、想いを伝えないと自分で決めたにも関わらず、もどかしい思いだった。

凛花に言い寄る男共にイラッとしながらも、彼女が無自覚な天然だったことに助けられてこの日を迎える。

凛花を手に入れるまでの道のりは、本当に長かった――

立ち読みサンプル
はここまで

第三章　新たな始まり

目が覚めると、そこは寝心地が良く高級そうなキングサイズのベッドの上だった。

隣には憧れの先輩から彼氏になったばかりの、寝顔も美しい蒼空さんがぐっすりと眠っている。

私も蒼空さんも、裸で何も身に着けていない。目を瞑っている無防備な姿が珍しくて、思わず凝視してしまう。きめの細かい色白の肌は、女の私よりも美しい。

男性と付き合うこともキスも初めての私が、それ以上のことまで一気に経験してしまうなんて……。蒼空さんにベッドへ運ばれてキスをされてから、私はずっと翻弄されていた。

蒼空さんから紡がれる愛の言葉と、私の身体を這いまわる巧みな手つきに、自然と口から恥ずかしい声が漏れてしまう。身体の軋(きし)みに、昨夜の情事を思い出して頬が赤くなった。

「ぷっ」

「えっ……？」

ぐっすり眠っていたはずの蒼空さんから笑いが漏れる。どうやら寝たふりをしていたらしい。

「凛花が可愛くて、目を開けられなかった」

「もう！　恥ずかしい……」

蒼空さんが眠っている間に布団から抜け出して、服を着ようと思っていたのに……